
不純愛 ~ my impure soul ~

葉月 あや

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

不純愛〜my impure soul〜

【Nコード】

N2834A

【作者名】

葉月 あや

【あらすじ】

この世に純愛なんて、ない。

ブローグ

あんたのことを

こんなにスキにならなければ

あたしのココロは

こんなに汚くならなかったのに

どうして、あんたは

あの子のことを

スキになったの？

くだらない話

「俺、原田と付き合うことになったんだ」

ハルキは言った。

あたしの耳は、一瞬なんの音も捉えられなくなった。

うそでしょ？

「マジで？」

あたしは言った。

声がすこし震えた。

平静を装うのが、こんなに大変なことなんて、

思ったことなんか、なかった。

指の先も、足の先も、ほっぺたも、

いつきに冷たくなる。

息をするのが苦しい。

胸がときどきする。

うそだ。

うそだって言つてよ。

そんなのうそだって。

でも、そんなことはありえない。

ハルキは照れくさそうに、そつぽを向いた。

やめてよ。

あたしの前で。

あたし以外の女を思つて、

そんな顔、しないでよ。

「なんであたしに、そんなこと教えてくれるの？」

ハルキは言葉を選びながら、こたえる。

「それはまあ、香田とはさ、一応いつも、つるんでるし」

「はかじゃないの？」

あたしが、あんたとつるんでるのは。

あたしが、あんたと仲良くなりたいたいからって、
ずっとそばにいたからなんだよ。

なに、深めの友情なんか、持つちゃってるの。

なんなのそれ。

ほんと、ばかみたい。

「あんたの事、スキになる奴なんかいたんだね。物好きだねえ」
ハルキの顔は、いわゆる賛否両論の顔だ。

いいと言う人もいるし、そうでもないと言う人もいる。

成績だって、中の下。

取り立てて目立つタイプじゃない。

あんたを気にかける女なんて、

あたしくらいのもんだと思ってたよ。

だから、安心して、

あんたをスキでいられたのに。

ばからしい話

原田みよ。

身長、推定150センチ。

ちょっと太めで、色が白い。

言うならば、マシユマロって感じ。

特に目立つところもなく、

すぐに忘れられちゃうような

おとなしい女。

要するに、暗い女。

暗いっつうのはさ、

あたしだって、人のこと

言えたもんじゃないんだけどさ。

ただ。

納得いかないんだよね。

あんな女のドコがいいの？

あたしの方が、顔だってスタイルだって

成績だってずっといいのに。

あたしは机に突っ伏しながら、開いた窓を見ていた。

10月になって、風が急に冷たくなった。

秋はスキだけど、

セピア色の空気がきらい。

意味もなく胸が締め付けられる。

人恋しくなるから。

今年の秋は、特に。

しんどい。

はやく、休み時間が終わればいいな。

寝てるふりって、けっこう疲れる。

あたしの周りには誰もいないから。

これしかすることがない。

教室の喧騒。

笑い声。

楽しそうな声が、あたしの力を

奪っていく。

組んだ腕のなかに顔をうずめて

しばらくすると、自分の息で

湿っぽくなってきた。

そろそろ、起き上がろうかな。

そしたら、なにしようか。

「香田さん、具合悪いの？」

突然、上から声が降ってきた。

助かった。

そう、思ったけど、

思ったことは、悟られたくない。

「べつに」

あたしは不機嫌な面構えで、

声の主を見た。

大野涼。

隣のクラスの男子。

しょっ中うちのクラスに来て、

あたしに話しかける。

「なら、いいんだけど」

「なら、放つといてよ」

あくまで、ひとりの時間を邪魔されて

気を悪くしたっていう態度は崩したくない。

ひとりでいたいから、ひとりでいる女。

女同士のいざこざとか、グループとかに

うんざりして独立したっていう姿勢。

「なんでいつもひとりなの？」

「ひとりが楽だから」

そう言わなきゃ、あまりにも惨めじゃないの。

誰とも仲良く出来なくて、だからひとりぼっち。

そんな事実、恥ずかしいし。

あぶれる者は、欠落者みたいだし。

だからクラスメイトに、あたしが誰かと一緒にいるところを

見られると、すこし気が休まる。

こういうの、

いつまで経っても慣れないな。

大勢の中のひとりぼっちはさ。

ていうか、大野がこんな質問してくるなんて

初めてだった。

あたしがいくらひとりでいても、

気にする様子なんかなく。

大野は大野の売り込みをしているもののなに。

もっばら、あたしの気でも引こうとして。

大野はにやつと笑った。

「なに？」

含み笑いはだいきらい。

半ギレであたしが言う。

「べつに」

この男は、たぶん、というか確実にあたしに惚れている。

だから、あたしを観察することも、

往々にして、あるんだろう。

「でもさ、ひとりきりじゃ、やっぱり寂しいっしょ？」

やっぱりバレてるんだ。

あたしが女子に嫌われてること。

「べつに」

あたしは廊下の方を見ながら言った。

そっちのほうに何かあるわけじゃなくて

大野の目を見るのが、

うつとうしくなってきたから。

うざい話題を振られるくらいなら

本当にひとりでいるほうが、まだマシだ。

ていうか、あたしに惚れてる奴に、

あたしが欠落者であることを

知られてるのは、いい気がしない。

「強がつちゃって」

「なにが言いたいの？」

「せっかちっすね」

あたしは立ち上がった。

もう、無理。

踏み込んだ話題とか、

勘弁して。

「待てよ」

廊下に向かうあたしの後を、大野がついてくる。

「なんなの？」

「どこいくんだよ」

「……」

「んだよ。なぐさめてやろーと思ったのに」

「は？」

「失恋中っしょ？ 藤井に」

あたしは目を見開いた。

「なんで……」

「見てればわかるっつの」

あたしはキッと大野をにらんだ。

どんどん早足になって、家庭科室の方まできた。

人影は、ない。

「香田」

「なに？」

ああ、もうヤダヤダ。

めんどくさいな。

ひとりになりたい。

だれもいないところで

たったひとりに。

「寂しかったら、オレのこと利用してもいいから」

ある程度、予想通りの言葉に、あたしはちっとも驚かなかった。

こたえは明確に決まっている。

お断りだ。

けど。

「考えとく」

そう言つて、その場を去つた。

あたしはあたし自身に嫌気がさす。

こういつふうに答えなくちゃ、

明日から、あたしのクラスに来て、

話しかける奴なんかなくなる。

ハルキは受身な男だ。

あたしがいつも話しかけに行っていた。

逆はない。

休み時間のクラスから逃げる目的もあったから

べつにいいんだけど。

いまはさ、もう

それも出来ない。

休み時間は

原田さんとハルキの

ふたりの時間だ。

ばからしい話（後書き）

ここまで読んでいただき、誠にありがとうございますm（――）m
情景の描写等、増やすべきとの有難いご指摘をいただき、精進して
いこうと決心いたしました。が、どうでしょう…。やっぱり少ないかな、
描写（汗）

うつとうしい話

席について、チャイムが鳴るのを待つ。
すぐに五時間目が始まった。

あたしはため息をつきたくなった。

今日のシメは学活。

席替え。

あたしはこのイベントが
鬱陶しくてたままない。

べつにドコの席に行っても

おんなじだよ。

あたしの隣に座った女は
眉をしかめるし。

あたしに惚れてる男は

必要以上に話しかけてくる。

そういう男に限って

やたらと女子に人気があるのが厄介だ。
そういう男とばかり話してると

また女たちに陰口の嵐が巻き起こる。

「香田は男好き」

ばか言ってるんじゃないわよ。

男好きはみんな一緒でしょ。

下手したら

あんたたちの方が

男に飢えてるように見えるよ。

あたしはただ。

男に好かれるから
そう言われるだけ。

うんざりする。

嫉妬とか。

そんな思いをぶつけられるほど。

あたしは

いい思いなんかしてないのに。

むしろ、落ちっぱなしだよ。

あたしは先輩受けがいい。

むろん、男の。

その先輩も例に漏れず人気者だったりする。

先輩ひとりにつきファン数名。イコールあたしの敵の数。

男の先輩のファンは女の先輩だったりする。

つまり。

入学してから、しょつ中呼び出し。

いつもごたごたしている。

事なかれ主義の友人たちは

すみやかに去って行った。

賢明な選択。

あたしもあの子らの立場だったら

おんなじことしてた。

ヘドが出るよ。

そんな中、大野はいわゆる『たいしたことない男』で、

だからといって

みすばらしいわけでもない。

しかも。

大野が誰かに思われてるとか

そういう噂は聞いたことがない。

同学年だからわりとそばに来てくれる。

貴重な存在だ。

男好きの汚名は免れないけど。

誰かの恨みを買うこともない。

だから、奴の好意を利用して

そばに引っ張っておきたいと

思ってしまう。

いつまでも続けられるもんでもないだろうけどさ。

はつきりいつて

あたしもたいがい

くだらない女だ。

同じ中2の、女の不良グループにも目をつけられている。
そんなあたしと好んで一緒にいるような女なんかない。
なら。

噂なんか気にしないで。

男友達ばっか作ってればいいともおもっ
けど。

あたしって、空っぽなんだ。

恋愛の好きとか

そういう情抜きに

相手を引っ張る魅力なんかない。

人間的な魅力がさ。

ハルキには…。

ほんと、必死こいてキャラ作って。

からっぽの中身を悟られないように必死になって
近づいていた。

こんなタイヘンなこと。

惚れた相手じゃなきゃ、
とてもじゃないけど出来ないよ。

あたしはそもそも人に同調するのが
大苦手だ。

社交辞令のひとつも言えない。
だから仮に男関係の

迷惑なごたごたがなかったとしても
あたしはひとりぼっちだったような気がする。

毎日顔をあわせているのに交換日記。
可愛い文字。

同じクラスなのにお手紙交換。
プリクラ交換。

友達の友達の顔写真なんかもらって、
どーするっていうの。

そういうのがよく
わかんない。

他愛ない話

まったく

これはどういうめぐり合わせなんだろう。

席替えはくじ引き。

女子のほうが多い。

だから、女子同士が並んで座るペアが、
2組出来る。

あたしは2年3組の生徒だ。

原田みよも2 - 3の生徒。

そして今、隣にいるのがその原田みよだ。

「後は自由時間だ。うるさくするなよ」

担任の広尾が言った。

そんなこと言っただって、

席替えの直後。

教室はざわめいている。

広尾は時々注意して、あとは何かの書類のチェックをしていた。

あたしは。

黙っていた。

「よろしくね、香田さん」

原田みよは、そんなあたしに話しかけて来た。
でもあたしは無視した。

こいつの声なんか聞きたくない。

そばにだつていたくないのに。

運命の女神様まで

あたしを嫌ってるのかな。

だからといって男神だって

味方についてるとは思えないけど。

聞こえなかったと思ったのか、原田みよは

「香田さん、よろしくね」

と、ほぼさっきの言葉を繰り返した。

あたしは視線をそっちに向けた。

原田みよは、にこつと笑った。

近くで見ても、おとなしそうで、
ぱつとしない女。

でも、暗いという感じでもない。
と

ふと思った。

にしても。

「変わってるね、あんた。

あたしと話してもいい事ないよ」

むしろ悪いことばかりだ。

あたしに向けられる嫉妬の、とばっちりとか。

「私、香田さんとはいつか話したいと思ってたの」

「は？」

一体、なにを言い出すかと思えば、そんなこと。
なんでまた。

わけわかんないな。

「香田さんてさ、綺麗だし、頭いいし、憧れてたの」
なにそれ。

社交辞令のつもり？

女のほめ言葉なんか、しらじらしくて、虫唾がはしる。

どうでもいいけど。

あたしは、一刻もはやく

あんたから遠ざかりたいよ。

でも。

こうして女の子と話すのは、久しぶりだったからか。
妙に新鮮だった。

変に、気持ちが分裂している。

それから原田みよは、あたしにいくつか質問した。

あたしはそのどれにも答えなかった。

程なく、沈黙が落ちた。

その沈黙が、原田みよには居心地悪そうに見えた。

だからといって、あたしから話し出す気にもなれない。

でも、黙ってぼんやりしてるのも、

突っ伏して外界を拒絶するのも

できない。

ふてくされたような態度で。

ツンとして見せてるけど。

沈黙が苦手なのは

あたしもおんなじだ。

仕方なく、あたしは

塾でもらった歴史の冊子を開いた。

かばんの中に入りっぱなしだったんだ。

「それ、歴史？」

原田みよは言った。

「……」

「ね、小野妹子って、へんな名前だと思わない？」

「……」

「女のひとの名前みたいだね？」

「……」

「遣唐使だっけ？」

「……遣隋使だよ」

あ。

原田みよは、にこつとした。

あたしは、なんとなく負けた気がした。

「ねえ、香田さん」

「……なに」

もう、いまさら無視するのも、

負け惜しみみたいだから、仕方なく答えた。

「大阪冬の陣、夏の陣って

順番が逆な気がしない？」

春夏秋冬なのにさ」

「べつに。冬が来たら春が来て、

つぎの夏が来るんだから自然でしょ」

「そっかあ」

原田みよは思案顔で首をかしげた。

不覚にも、ちよつと可愛いと思った。

他愛ない話（後書き）

ここまでお読みいただき、ありがとうございます

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2834a/>

不純愛 ~ my impure soul ~

2010年10月28日03時58分発行